

二〇〇六年(平成18)、福岡県でいじめにあった中学二年の男子生徒が自殺した。衝撃だったのは報道された加害生徒の無反省ぶりである。そりゃあ私も教員だからいじめの加害者が被害者に対して責任を感じる方がいいに少ないかは実感している。しかし、いくらなんでもヒト一人死んだらなんか感じるのが普通じゃないのか。

「親の顔が見たい」

というタイトルは最初の打ち合わせで決まった。文章は短ければ短いほど難しいと信じる私にとってタイトルをひねり出すのは苦手中の苦手なのだが、こんなにすんなり決まったのは後にも先にもない。

「先生、ウチの子のことわかってるんですか?」

など、作中には実際に私が親御さんに言われた言葉が多く引用されているが、それでも多くの部分を取材に頼らねばならなかった。いっぱしの教員のつもりでも、実はぬるい現場しか体験していないという事実

が、ピンバシ胸に刺さった。

私にこの戯曲を書かせてくれたプロデューサーの磯辺万沙子氏、血肉を与えてくださった演出の黒岩亮氏、劇団昂の役者さん、スタッフの方々、また陰に日向に応援してくれた渡辺源四郎商店のみんなにとても感謝している。

初演をご覧になったあるお客様から、

「現実はいくらもんじゃないですよ」

という感想をいただいた。都内の中学教師をされている方である。現実には常にフィクションの先に行く。いじめという現象がなくなる日が果たして来るのか、それはわからない。それでも、教室を覆う悲しい霧が一日も早く晴れることを願ってやまない。

畑澤聖悟